

方において、本来国民誰にでも保障された大切な権利だと考えています。

先ほどご説明いただいたように、国に対して、教育予算の充実や公的支援の拡充を求めていくことは大変重要なことだというふうに思っていますし、昨今の厳しい社会情勢の中で、卒業後、奨学金等の返済に苦しんでいらっしゃる方がいるということも、また事実であるというふうにも思っております。

三重県議会においては、本年3月に、「奨学金制度の充実等を求める意見書」を採択し、内閣総理大臣に提出しました。この意見書では、学習意欲と能力のある若者が家庭の経済状況にかかわらず、安心して学業に専念できる環境を保障するために、大学生等を対象とした給付型奨学金制度の創設や、無利子奨学金の充実、返還猶予、返還免除などの救済制度の周知と拡充などを国に求めています。

三重県では、若者の県内定着のインセンティブとして、大学生等の奨学金の返還額の一部を助成する制度の創設の検討が進められております。当委員会でも説明が行われました。

多くの県内市町においても奨学金が制度化されています。例えば、鈴鹿市においても、いくつかの条件はありますが、給付型の奨学金が設けられています。また、全国的には、社員の奨学金返済を支援する企業の取組が少しずつ広まってもきています。

このように、奨学金返済の負担軽減は、社会的に大きな問題として認識されてきていると思いますし、奨学金のあり方についても、より良い方向への十分な議論が今後必要だと思っています。

現在、国において、大学等で勉学する学生に対しての公的な給付型奨学金創設の議論が始まりました。しかし、財源の確保や、大学に進学しなかった同世代との公平性などが問題となっており、制度設計の詳細が明確になるのはもう少し先であると思われます。

私たち、子どもの貧困対策調査特別委員会が実施した県内調査においても、社

会的・経済的に厳しい状況に置かれている子どもたちへの支援の中で、奨学金についてのご意見、ご要望もいただきました。今後委員会としても、さらなる調査を進める中で、公的な給付型奨学金制度のあり方等について議論してまいりたいと考えています。また、必要に応じて国に対しての働きかけも検討するなど、経済的な理由により学びの機会が奪われるという社会的な損失を防ぐための手法を検討していきたいと考えています。

○神戸高等学校

答弁ありがとうございました。

我々高校生は、これから進学を志しております。教育について、これからも公平な環境をつくっていただきたいと思います。これからもどうかよろしく願います。

以上で質問を終わります。（拍手）

○議長（松林里歩）

それでは、議長交代のため、着席のまゝ、暫時休憩いたします。（拍手）

〔松林里歩議員移動、
服部源太郎議員議長席に着く〕

○議長（服部源太郎）

暁高等学校の服部源太郎です。よろしく願います。（拍手）



休憩前に引き続き会議を開きます。

県政に対する質問を継続いたします。

桑名高等学校、13番 宇野陽香議員、
14番 山口朱音議員、15番 内田万鈴議員、
16番 島田花恋議員。



○桑名高等学校（宇野陽香、山口朱音、内田万鈴、島田花恋）

三重県立桑名高等学校衛生看護科は、県内唯一の看護学科であり、5年一貫教育のもと、同じ夢を持つ仲間とともに看護を学んでいます。【パネルD-1】

私たちは、衛生看護科の3年間と衛生看護専攻科の2年間の学習を終え、毎年2月に実施される看護師国家試験に合格して、看護師の資格を取得することを目指しています。普通教科の学習に加えて、看護の専門教科を学び、医師や薬剤師等の外部講師の先生による授業や、長期間にわたって病院等で実践的な経験を積む臨地実習があります。

こうした中で、今日は看護師の人材確保について質問したいと思います。

高校2年生になり、校内実習も始まりました。【パネルD-2】私たちが学んでいる内容は、まだ初歩の部分なのですが、患者のことだけでなく、その家族の方々への思いであったり、自分自身のことまでもとても深く考えられ、思いやりにあふれ、大きな輝きを秘めたすばらしい職業だと改めて感じています。

その反面、命を預かる職業として責任があり、難しいと感じることもたくさんあります。

また、私たちは、学習する中で、看護は継続学習が必要だということをよく耳にします。医療の研究が日進月歩でなされていく中で、新たな知識や多様化する対象の方々とかかわっていかねばならず、一度資格を取得しても学び続けなければなりません。

私たちを含め、女性の多い職種である看護師ですが、将来的に結婚、出産、子

育てのために一時仕事を離れなければならない時期があると思います。この後の復帰についての不安もあります。ただでさえ、継続学習が必要とされている中で、職を離れることの不安は計り知れません。

このように憧れを抱く半面、高度な専門知識と技能を有する看護師の確保、産休、育休等からの復帰支援が必要と考えます。このことについて、県での具体的な取組と復帰状況についてお伺いしたいと思います。

同時に、女性の多い職ではありますが、男性看護師を必要とする現場でもあり、男性看護師が増えることで、産休、育休、子育てのための環境も整うのではないかと思います。人材不足を考える中、看護師が一生働き続けることのできる体制、職場環境についての関心と理解を深めることが必要ではないでしょうか。

私たちは、中学の段階で看護の道を志しました。多くは、幼少時の入院体験や家族の入院をきっかけにというものです。また、中学の職場体験が進路決定に大きくかかわっています。早い段階での志で、看護を目指している私たちの先輩のほとんどは看護職に就いています。私たちのように、看護師を目指す人が増えるような仕組みづくりが必要となっているのではないのでしょうか。

このことについて、三重県では、今後看護師の確保のために、どのように取り組まれていくかについてお聞きしたいと思います。

○健康福祉病院常任委員長（小島智子）

桑名高等学校衛生看護科の皆さんから、看護師の人材確保についてご質問いただきました。



私も桑名市からここに参っておりますけれども、桑員を中心とした地域の中で、皆さんの先輩方に地域医療の担い手として大変ご活躍をいただいています。皆さんもそれを目指して、高い志を持って日々勉学に励んでみえるとのこと、敬意を表したいと思います。

さて、まず女性が働くという意味で少し答弁をさせていただきます。

女性の働いている率は、25歳から29歳で現在ピークを迎えていますけれども、30歳代になりますと10%ほど下がります。そして、その後、再び上昇するという、いわゆるM字カーブというものを描くことはご存じでしょうか。女性の働いている率の低下には、出産、そして育児による離職というのが影響しています。

三重県が実施したあるアンケートでは、出産、子育てなどで一旦離職すると、約6割の女性が知識・スキル面で仕事についていけないと考えていることがわかりました。

中でも、日々進歩する医療現場では、看護師さんたちは毎日が勉強であり、仕事から離れる、ブランクがあるということの不安はさらに大きいと思います。

そのため、三重県では、出産などでの休職から復職しやすく、子育て中も仕事を続けられるよう取組を進めています。病院によっては、産前産後休暇や育児休業中の職員の復職に向けた面談、研修を実施しているところもあるようです。

県としては、子どもを預けることのできる、例えば病院内保育所の設置に対する支援を行っています。病院内保育所については、設置は少しずつ進んできていますがけれども、看護師さんたちは夜勤があります。この夜勤の間、預かってくれるところはまだまだ少ないなど、課題はたくさんあります。

先ほど、皆さんは幼少期の入院体験が看護師を目指すきっかけになったというお話をされましたけれども、子どものころから看護師という仕事に触れる機会を増やすことは、看護師を目指す人を増やすというだけではなくて、看護への理解

を広げていくということにとっても、とても大切です。

実際に体験することで、看護という仕事の喜び、すばらしさが直接伝わり、その中から看護師を目指す人が育つと考えています。

三重県でも、5月12日の看護の日に合わせて、看護の心を広めるための「みえ看護フェスタ」の開催、夏休み期間を活用した1日看護体験など、中高生を対象としたイベントも開催しているところです。

また、県内の中学校や高校に看護師が出前授業に行くなど、看護職の魅力、命の大切さを伝える取組も進めています。

また、先ほどの質問の中で、女性だけではなくて、男性看護師さんの存在にも触れていただきましたが、もちろん看護師の仕事は女性だけの仕事ではありません。県内でも女性に比べて少ないものの、多くの男性看護師が活躍されています。

今後は、男子中学生、男子高校生などにも看護イベントへの参加を積極的に働きかけ、男性の特性を生かした看護現場での活躍もPRをしていきたいと思えます。

本委員会でも、今日いただいたご質問、そしてご意見を踏まえ、看護師を目指すきっかけづくりや働きやすい職場づくりの取組も含めた看護師確保に向けて、しっかりと進めてまいりたいと思えます。医師確保というのが多く議論になりますけれども、看護師さんが足りない中で十分な医療はできません。ですので、しっかりと看護師確保に向けて、具体的な取組につなげていきたいと考えています。

最後になりますが、桑名高等学校衛生看護科の皆さん、実習とか、それから5年が終わったら国家試験もあると思えます。けれども、皆さんは志を持ってここにいらっしゃるわけですから、どうか看護師になって、できれば三重県内の病院で働いていただきますように強く求めたいと思えます。心から応援しています。

○桑名高等学校

ご答弁ありがとうございます。

私たちは、今はまだ看護師の現場のことを深く分かりませんが、話し合いをする中で、人材不足からくる仕事量の多さにより離職するのではないかと思いました。そして、これが人材不足をさらに深刻化させて、悪循環が起こっていると考えました。どうすればこの悪循環から抜け出せるかを考えた結果、このような質問をさせていただきました。県が協力し、対策を行っていただいていることが分かり、安心できました。

今後一層、現場の意見にも耳を傾けていただき、また、私たちのように早い段階で看護の道に進むことを決断した人をサポートしていただき、今学んでいる私たちも安心して看護師を目指すことができるようにしていただきたいと思います。よろしくお願いします。

以上で質問を終わります。（拍手）

○議長（服部源太郎）

いなべ総合学園高等学校、17番 海老原未来議員、18番 岡本梨花議員、19番 多湖純平議員、20番 山岡里彩議員。



○いなべ総合学園高等学校（海老原未来、岡本梨花、多湖純平、山岡里彩）

いなべ総合学園の岡本梨花です。多湖純平です。山岡里彩です。海老原未来です。よろしくお願いします。

今から質問を始めます。

私たちは、介護の情報がどの程度地域の人に行き渡っているかについて、アンケートをとって調べてみました。【パネルE-1～5】

まず、基本情報ですが、いなべ市にお

住まいの方を中心に協力いただきました。そして、年代別に見ると、40代が24名と、40代の方が多い結果となりました。

アンケート項目は、大きく「基本情報」「介護保険」「将来の不安と解決策」「地域の情報力」です。

まず、「介護のことについて相談できる場所を知っていますか」というアンケートでは、「あまり知らない」「全く知らない」という人が42人中29人で、69%と多いことが分かります。

次に、「介護保険についてどの程度ご存じですか」という質問では、「あまり知らない」「全く知らない」と答えた人が42人中27人で64%と、先ほどの質問と同様に60%を超えています。

そして、「介護保険の申請についてどの程度ご存じですか」という質問では、「あまり知らない」「全く知らない」と答えた人が42人中29人で69%と、こちらも高いことが分かります。

ここまでの介護保険についてのアンケートなのですが、3つの質問全てが60%を超えているため、地域の人に介護保険の情報が十分に行き渡っていないということが分かりました。

しかし、一方では、【パネルE-6～8】「自分や自分の家族に介護が必要になった時のことを考えたことはありますか」という質問に対して、「よくある」「ある」と答えた人が全体の71%ととても高く、介護が必要になったときのことに不安や関心があることが分かりました。

また、「年齢を重ねることでのどのようなことに不安を感じますか」という質問に対しては、やはり「介護や健康への不安を感じる」と答えた方が39人中25人で64%と大多数を占めました。

これらの調査結果から、自分や自分の家族の介護に関することや健康にかかわることに不安や関心があるにもかかわらず、その不安を解消するための介護保険などの情報が行き渡っていないということが分かりました。

情報提供のあり方なのですが、私たちはインターネットを使うことが多いので、

地域の方がどの程度使われているかについて、アンケートで調べてみました。

【パネルE-9～11】

このアンケートから、インターネットを「全く使わない」または「あまり使わない」と回答した方は55%、一方で地域広報誌から情報を得られている方は複数回答で44%ですが、回答された人数を数えると28人となり、42人中66%の方が地域広報誌から情報を得ていることが分かりました。

ここで提案なのですが、【パネルE-12～13】地域広報誌に介護が必要になったときの相談先や、介護保険や介護認定についての情報を分かりやすく掲載してみてはいかがでしょうか。

私たちが調べたところによると、「ぼろん」「よっかいち a i」などの地域のフリーペーパーを読まれている方が多く、このような雑誌に介護保険の情報を掲載することで、今より多くの人に情報を届けることができると思います。

ただ、介護保険は市町村が主体となっておられるため、県としては大きな方向性を示していただければと思います。

これを踏まえ、もう一つ提案なのですが、「医療ネットみえ」のようなわかりやすい形で介護保険の情報を発信していただくのはいかがでしょうか。今回のアンケートでは、インターネットはあまり使われていないという結果でしたが、今後は増加傾向にあると考えます。

こちらが「医療ネットみえ」です。

【パネルE-14～15】

そして、例として、「介護ネットみえ」をつくってみました。

このような形にすることで、どこで誰に相談すればよいのか分かり、本当に困っている人たちが適切に介護保険を利用してもらえenと思います。

○健康福祉病院常任委員長（小島智子）

いなべ総合学園高等学校の皆さん、ご質問をありがとうございました。

身近な方にアンケートをとって、実際に数値から見えてきた課題を質問につな

げてくださり、素晴らしいなと思っています。



さて、皆さんがとってきてくださったアンケートから分かることが幾つかあります。アンケートでは、多くの方が、年齢を重ねることで、介護あるいは健康等に不安を感じているということです。そして、一方で、介護のことで相談できる場所、介護保険制度について、「あまり知らない」「全く知らない」と多くの方が答えてみえるということでした。年代が40代の方が多いということも、もしかしたらあるのかもしれませんが。自分の課題としては少し遠い、そして40代の方の親御さんだと、まだもしかしたら介護等が必要でないかもしれないということも考えられます。

でも、不安を感じているのに介護についてあまり知らないというのはなぜでしょうか。先ほど提案してくださったように、広報が足りないというのもその一つでしょう。

けれども、もう一つ大きな原因があるのではないかと思います。それは、介護保険制度そのものの難しさと、実際に利用する立場にならないと、どこの施設を使うかはっきりしないということだと思います。そのため、相談できる場所というのはとても重要になってきます。県内の全ての市町には、「地域包括支援センター」というものが設置されており、介護の一般的な相談から、場合によってはケアプランの作成まで対応しています。

残念ながら、アンケート結果では、この相談できる場所が分からないという答えが多かったようなので、この点については、きちんと県民の皆さんに情報が届

くように、もう少し広報の仕方に工夫が必要だと考えます。

また、介護が必要となったとき、欲しい情報がいつでもどこでも手に入るということもとても大切だと思います。今回、実際の広報の仕方について、2点ご提案をいただきました。地域広報誌、それからインターネットの活用、この2つとも、とてもいい提案だと思います。皆さんのように若い方に向けた広報であれば、このような方法もとても有効でしょう。けれども、介護の情報を必要としている人は、もっと幅広い世代にわたります。実際にどの方法で伝えるのが一番効果的かということは、それぞれの市町の人口、そして年齢構成、インターネットを使っているかどうか等によって事情が異なりますので、この場でどれが一番効果的だということはなかなかお答えをしにくいところではあります。

今日ご提案いただいた地域広報誌、あるいはインターネットの活用については、県と市町の連絡会等がありますので、その中でぜひお伝えをさせていただきたいと考えています。

最後になりますが、いなべ総合学園の皆さんが介護や福祉に興味を持って、自分のこととして、これから未来の課題として考えてくださっていること、本当に素晴らしいと思います。皆さんのような方がもっと増えて、いろんな知恵を出し合えるようになれば、きっと誰もが安心して暮らせる三重県になっていくと思います。

委員会としましても、県民の皆さんがこれから先、どうやって安心して暮らせるか、年をとっても、この三重県のそれぞれの地域で暮らし続けるにはどういったことが必要かということについて、今日いただいた提案も参考にさせていただきながら、十分に議論を深めていきたいと思っています。

本日は、アンケートに基づきました、しっかりした提案をいただいたと思います。どうもありがとうございました。

○いなべ総合学園高等学校

答弁ありがとうございました。

実は、この質問をするに至った経緯として、私の祖母に介護用具が必要になったときに、どこに相談してよいのか分からず困ったことがあったからです。

このような問題は、私だけではなく、地域の方にも多く見られる、大変素朴で当たり前にある問題だと思います。ぜひ、このようなことが少しでも減少していくような県政をよろしくお願いします。

以上で質問を終わります。（拍手）

○議長（服部源太郎）

津高等学校、21番 松林由起議員、22番 松林里歩議員、23番 福島彩花議員。



○津高等学校（松林由起、松林里歩、福島彩花）

今から、津高等学校の質問を始めます。

私たちが質問したい項目は、将来の三重県を担う青少年の育成についてです。

私たちは津高校で、三重県の将来について考える取組をしてきました。そこで私たちは、三重県の将来をよくするためには若者の力が大切だと考え、若者のUターン問題に興味を持ちました。

現在の三重県では、県の政策の概要にもあるとおり、人口減少、少子高齢化と若者の人口流出、また、若者のUターンについて等、様々な問題があります。少子化、高齢化、核家族化が進行し、2020年には65歳以上人口の占める割合が約30%になると予測されています。津高生のほとんどは大学進学を目指しており、その中の多くが県外の大学を志望しています。3年生のあるクラスでアンケートをとったところ、県外に進学したいと考

えている人が88%、県外に就職したいと考えている人が82%という結果になりました。

三重県には、海もあり山もあり、また、大阪や名古屋などの大都市に近いことなど、たくさんの魅力があります。若者の人口流出を抑え、三重県の人口減少を食い止めるためには、このような三重県の魅力を十分に感じる事が大切になってくるのではないのでしょうか。

「みえ高校生県議会」に参加するに当たり、私たちは三重県のホームページや教育ビジョンを見ることによって、三重県の政策を調べてきました。

そこで、私たちは、三重県では様々な政策が実施されていることに気づきました。同時に、行政のかかわる政策が私たちの伝わってこない、政策の概要が抽象的過ぎて分かりづらいということにも気づきました。紙やポスター、ホームページでは取組が紹介されてはいるものの、特別関心のない高校生とは距離があるように思われます。

先ほど、三重県の漫画を制作したと常任委員長がおっしゃっていましたが、確かに私ももらったという記憶がありますが、申し訳ないんですが、友達とそれについて深く話すということはありませんでした。それは、学校からパンフレットのようなものをもらったというだけで、そこにどんな意図があるのか全員が知ることができない、受け身の体制になっているからだと考えました。

そこで、私たちは教育の一環として、三重県の政策や三重県の良さを伝えていくことを提案します。その教育は、決して先生が三重県について話をするだけの受け身のものではなく、生徒がインターネットや書籍などを通して調べ、実際に現地を訪れたり、祭りに参加したりして、積極的、主体的に体験を通して知るというものです。若者が自分の地域を愛するためには、まずは自分の地域を深く知ることが大切です。また、若いころの経験、感性はとても大切で、小学生や中学生の時におもしろいと感じたことは、将来の

職業選択に大いにかかわってくるものです。

私たちは将来、大学で学んだ後に地元に戻り、市長になって地域の行政を担ったり、小学校の先生になって地域の将来を担う子どもたちを育成したりして、地域に貢献したいと思っています。思いは、慣れ親しんだ環境で恩返しをしたい、三重の祭りが好きと様々です。教育の一環として、主体的に三重を知ることができれば、そのように三重県に貢献したいと思う人が増えるのではないかと思います。が、いかがでしょうか。

○教育警察常任委員長（村林聡）

少子高齢化などと一緒に語られることの多いこの問題ですが、人口流出こそがこの問題のポイントであると着眼されたことに、私は敬意を表したいと思います。



三重県は現在、三重の子どもたちが楽しく遊びながら、三重の自然、歴史、祭りなどを学べるように、三重の特徴的なテーマを題材とした、「ふるさと三重かるた」を作成、配付し、身近な地域や三重にかかわる教材を提供して活用する取組を進めています。

また、自分たちが住んでいる地域の課題を解決するため、高校生が地域に出向き、地域住民の皆さんと協議しながら取組を進めている学校もあります。

例えば、尾鷲高等学校では、大学と連携して、地元市町の課題について、生徒たちが現地調査をして、グループディスカッションなどを通じて、それらの課題解決策や活性化案などを地元の皆さんに提案するなどの取組もあり、県ではこれ

らの取組などへの支援も市町と連携して行っております。

しかし、今ご紹介したような、地域と一緒に課題を解決するようなところは、特に人口流出の激しい地域の小規模な高校というところが多いです。ですので、都市部の高校であるとか、大きな進学校であるとか、そのような高校で地域と密着していく取組というのはどういうことができるのかということを、当委員会としても今後さらに議論を深めてまいりたいと思います。

ぜひ皆さんにも、自分の将来を考えたときにあわせて考えてほしいことがあります。それは、単に就職先を探すだけでよいのか、どうすれば農林水産業が今後も営みとして続けられるのか。そして、志を立てる際には、自分のふるさとのことや先祖のルーツなどもあわせて考えていただけると大変ありがたいかなと、そのように感じました。

○津高等学校

答弁ありがとうございました。

私たちが将来のことを考えるときに、自分のことだけでなく、地域のこととも考えて、将来の職業選択につなげていけたらいいと思います。

これで津高校の質問を終わります。ありがとうございました。（拍手）

○議長（服部源太郎）

高田高等学校、24番 梅村一太郎議員、25番 稲葉雅紀議員、26番 石川沙歩議員。



○高田高等学校（梅村一太郎、稲葉雅紀、石川沙歩）

高田高校です。僕たちは、三重の高校生サミットの定期開催のご提案をさせていただこうと思います。

鈴木知事も開会の際におっしゃいましたけれども、三重の高校生サミットは、伊勢志摩サミットでも、ジュニア・サミットでもなく、また違うんですね。これ、高校生の議員の皆さん、ご存じでしたか。もし知っているという方がいたら手を挙げてもらいたいんですけども、いかがでしょうか。

このように、ほとんどの方がご存じないんですよ。メディアの方も伊勢志摩サミットとかジュニア・サミットに集中してしまったせいで、あまり大々的に取り上げられなかったんですけど、実を言いますと、僕は三重の高校生サミットに参加させていただきまして、当日は山口教育長と写真の際に肩を組ませていただきました。この場を借りて山口教育長に深く御礼申し上げます。ありがとうございます。

ちょっと話がそれましたけれども、さっき申しましたように、伊勢志摩サミットとかジュニア・サミットよりも知名度は低い高校生サミットなんですけれども、今回僕が参加してみて、ぜひ定期開催していただきたい、それほど価値のあるものだったということを伝えたくて、今日、僕たちはみえ高校生県議会に参加させていただきました。

その理由は、これからの三重にとって、非常に重要な3つの「場」がここにあると思ったからです。それを今から石川議員と梅村議員からご説明させていただきます。

1つ目は、「学生たちの交流の場」です。今回は三重の学生が約80名集まって、学生の間でのコミュニティーの輪が広がりました。これからともに三重を支えていく仲間に出会えたのは、すごく良い機会になったと思います。

2つ目は、「ディスカッションの場」です。今、日本ではディスカッション能力が求められています。学校教育でディスカッションの授業をもっと取り入れる

べきだという声を聞きますが、三重の高校生サミットを定期開催することででも、ディスカッション能力の向上に好影響を及ぼすことが期待できるのではないのでしょうか。

そして、3つ目が、「一人ひとりに夢を与える場」です。

今回の三重の高校生サミットでは、世界経済から環境問題まで、様々な課題解決案が提案されました。ここで私たちは思いました。これを県議会で活用できないかと。

例えば、県議会で議論が難航しているものを三重の高校生サミットの場合に委ねていただき、出てきた結論をもとにして、県議会で学生たちの意見を取り入れていただくというものです。個人個人の意見はか細いものかもしれませんが、自分が県政に少しでもかかわったというのは、学生たちにとってとてもいい経験であり、達成感の得られるものだと思います。このように、常に県議会と学生が連携をとり合うことで、世代を超えたディスカッションが活発化し、双方が新たな視野を獲得して、相乗効果により、良い未来を構築できると思います。

また、これにより地元に貢献しようとする意欲のある学生が増加し、地域貢献活動レベルの底上げが期待できます。

以上のことにより、私たちには3つの提案があります。

1つ目は、三重の高校生サミットのような県公認学生ディスカッション機関の定期開催。

2つ目は、県内でのディスカッションを用いた教育の活発化。

3つ目は、学生ディスカッション機関と県議会の連携。

このような教育改革を進めることは、三重の地域活力の向上など、多方面につながるとは思いますが、これらの本校の提案について考えをお聞かせください。

○教育警察常任委員長（村林聡）

お答えします。三重の高校生サミットが良いものであったということは私も聞

いております。県の教育委員会は、平成26年度から学校の枠を超えたディスカッションを行う交流の場、「みえ未来人育成塾」をこれまでも開催してきました。今回、三重の高校生サミットがあり、また次年度以降も何らかの形で開催する方向だというようには聞いております。ただ、その検討されているものがどういう方向になるのかということは、今ご提案いただいたことを踏まえて、委員会に持ち帰って議論したいと考えているところです。

今までの「みえ未来人育成塾」というのは、講師の方を呼んで、その講演をもとにディスカッションしていく、それはディスカッションプラス報告会という形だったそうです。今回の高校生サミットは断然パワーアップしておりまして、生徒の参加規模も断然大きいですし、提言もするという形となったわけです。さらに、それを踏まえて、今後どうしていくのかということ、教育長もおられますけど、委員会としても議論していきたい。

ただ、私が1つ説明を受けて心配だなと思ったのが、教育委員会の取組ですので、県立高校が対象だったんですね。私立の高校が参加できるものになるのかどうかというのは、ひょっとすると分からない部分もあると思いますので、サミットを契機とした地域の総合力向上調査特別委員長とも、あるいは私立高校を所管している環境生活農林水産常任委員長とも話をする必要もあるかもしれませんが、ぜひご提案いただいたような形の方でより良いそういう議論の場がくれたらなというふうに議論していきたいと思います。

また、ほかに、広聴広報会議委員の皆さんが実施している、この「みえ高校生県議会」や「みえ県議会出前講座」、「みえ現場d e 県議会」というような様々なご意見をいただいて提案をお聞きする場がありますので、今後ともぜひ、卒業してからも、こうした様々な機会に積極的にご参加いただきますようよろしくお願いします。

○高田高等学校

先ほどの答弁の中でもお話がありましたが、我々高田高校は私立高校であり、県立高校ではありません。しかし、税金というものは、みんな同じように払っているものです。その中で、高田高校と県立高校が同じようにできるためには、まずは授業料を無償化してほしいと思っています。これについて意見をお願いします。

○教育警察常任委員長



私は教育警察常任委員長ということで、私の所管している県の教育委員会というのは、県立高校の話です。環境生活農林水産常任委員会の生活の部分が私立の高校の話です。だからといって、そちらの委員長に投げよと言っているわけではありません。私立高校の授業の無償化という話でしたけれども、選択肢を公平にするためにできるだけ負担を軽減していこうじゃないかという議論自体はしているところではあります。いきなり無償化ということを今この場で明言することはできません。しかし、教育の機会均等や、あるいは貧困の問題もありますから、そうした話と連動しながら今後も議論していく、あるいはされていくものであらうと考えます。

○高田高等学校

ご答弁ありがとうございました。

なお、先ほど私たちが提案いたしました三重の高校生サミットなんですけれども、今後、なるべく多くの生徒たちが参加できるように努めていただきたいと思います。

います。どうぞよろしくお願いします。
ありがとうございました。（拍手）

○議長（服部源太郎）

暫時休憩いたします。（拍手）

〔午後 2 時 48 分 休憩〕

〔午後 3 時 5 分 再開〕

○三重県議会副議長（日沖正信）

それでは、草川議長、議長席にお着き願います。

〔草川史織議員議長席に着く〕

○議長（草川史織）

セントヨゼフ女子学園高等学校の草川史織です。よろしくお願いします。（拍手）



休憩前に引き続き会議を開きます。

県政に対する質問を継続いたします。

川越高等学校、27番 西本梨乃議員、
28番 水谷元紀議員、29番 川本陽菜議員、
30番 渡辺莉帆議員。



○川越高等学校（西本梨乃、水谷元紀、川本陽菜、渡辺莉帆）

ただいまから、川越高校の質問を始めます。